

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：13401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K18502

研究課題名（和文）中古語における潜伏疑問文の探索と名詞句の意味記述に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on searching for consealed question and describing the meaning of noun phrases in early Middle Japanese.

研究代表者

高山 善行（TAKAYAMA, YOSHIYUKI）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・教授

研究者番号：90206897

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中古語における潜伏疑問文の探索方法を開拓することが主たる目的である。その準備段階として、現代語の意味論、語用論研究の成果を名詞句の記述に導入することも重要となる。本研究では、西山佑司氏が推進する現代語の名詞句の理論的研究を中古語に応用し、これまでまとまった調査がなされていなかった潜伏疑問文の抽出に成功した。

本研究における探索のプロセス、実際に抽出した潜伏疑問文の用例（現代語訳付き）、現時点での簡略な分析については、国語語彙史研究会で口頭発表を行うとともに、研究成果報告書を刊行し、専門分野および関連分野の研究者に送付済みである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第一に中古語の疑問文研究、名詞句研究を進展させるものであるが、調査・分析データを活用することにより、現代語や他言語の研究にも寄与する。潜伏疑問文は、平叙文と疑問文の中間に位置するものであり、文法研究のポイントとなる。また、名詞句の記述は語彙研究につながる。本研究の学術的意義は大きいといえる。

本研究の成果は、今後古語辞典の編集に影響を与えることになり、古典語理解、古典語教育を進展させるであろう。それによって、国内外の人々の古典文学、日本文化への理解が深まっていく。社会的意義においても大きなものがある。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this study is to develop a method for searching for consealed questions in early Middle Japanese. As a preparatory step, it is also important to introduce the results of research on the semantics and pragmatics of modern languages into the description of noun phrases. In this study, we applied the theoretical study of modern noun phrases promoted by Mr. Yuji Nishiyama to language in early Middle Japanese, and succeeded in extracting consealed questions that had not been extensively investigated so far.

The search process in this research, examples of consealed questions actually extracted (with modern Japanese translation), and a brief analysis at the present time will be presented orally at the research of Japanese Vocabulary and a research result report will be published. It has already been sent to researchers in specialized fields and related fields.

研究分野：日本語学

キーワード：文法史 中古語 疑問文 名詞句

1. 研究開始当初の背景

本研究の構想は、「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」(国立国語研究所共同研究プロジェクト)を背景とするものである。応募者はプロジェクトメンバーとして日本語の間接疑問文の成立について考究し、潜伏疑問文の重要性に気づいた。これまでの文法史研究は述部が中心であった。また、疑問文は係結び研究の一部として扱うことが多い。そのため潜伏疑問文は研究上の盲点となっていたと思われる。この構文は間接疑問文、並列構文、引用構文と密接な関係があり(右下図)、記述分析が必要である。現代語研究では、「メンタルスペース理論」「特質構造」などの多様なアプローチにより名詞句の記述分析が行われている。潜伏疑問文については、西山(2003)(2013)、西垣内(2016)が論じており、「変項名詞句」をめぐっては、金水(2016)の理論的検討がある。現代語の意味理論を導入すれば、古代語名詞句の意味の体系的記述が可能になる。なお、予備的調査では、実際に潜伏疑問文の探索を行い、抽出手順を確認している。

2. 研究の目的

古代語名詞句の研究は理論面で大きく遅れており、文法史研究、語彙史研究の進展を妨げている。この状況を打開するには、新しい視点からのアプローチが必要である。本研究は、中古語を対象として潜伏疑問文(consealed question)の探索を行い、名詞句の意味を体系的に記述する方法を提示する。この構文は現代語研究で扱われるが、中古語では調査分析がなされていない。本研究では和文文学作品を資料とし、現代語の意味理論で用いる概念装置を導入して、潜伏疑問文を名詞句の統語的特徴、主要部名詞の意味特性、使用条件の観点から分析する。本研究のデータは、史的研究のみならず現代語や他言語の研究においても活用が期待できる。

3. 研究の方法

潜伏疑問文は疑問詞疑問文と等価な意味機能をもつ名詞句(変項名詞句)を含む構文であり、右図の意味構造をしている。(1a)の名詞句(下線部)は、(1b)の疑問節と意味的に対応する。

潜伏疑問文：変項名詞句 + 述語

(1)a. 花子の好きな作曲家が分からない。(潜伏疑問文)

b. 花子の好きな作曲家が誰であるか分からない。(間接疑問文)

中古語の場合は、(1a)に相当する例はあるが、(1b)に相当する例は確認されていない。

(2)いにし所も知らず。(伊勢物語) / 現代語訳「(女が)どこへ行ったか分からない」

本研究では、以下の() ~ ()の作業手順によって潜伏疑問文の探索、分析を行う。

() 潜伏疑問文の探索

() 述語動詞の選定：現代語の述語リスト(西山 2013)を参考に予備的調査の段階

で、「知る」「忘る」「考ふ」など10語を選定済みである。それらを「日本語歴史コーパス(CHJ)」(国立国語研究所)で検索し、注釈書から用例を収集する。

() 名詞句の抽出: ()で収集した用例群の述語の項位置には様々な要素(並列節、準体句など)が生起することが予想される。それらを分類整理して名詞句を取り出す。ただし、名詞句以外の要素も重要であるから、切り捨てずに記述しておく。

() 潜伏疑問文の抽出: 「変項名詞句」は非指示的で、かつ疑問詞疑問文で解釈可能な名詞句である(西山2003)。()で取り出した名詞句の用例群を対象に、意味解釈によって変項名詞句を判別し、その名詞句を含む構文を潜伏疑問文として認定する。

() 潜伏疑問文の分析

以下の3点について記述分析を行う。

- (a)名詞句の形態的・統語的特徴
- (b)主要部名詞の意味特性
- (c)使用される場面・文脈

() 理論的検討

現代語との対照の観点から、中古語の潜伏疑問文の特質を明らかにする。本研究は、下記のように進めた。

平成30年度	中古前期資料における調査分析	『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』を資料とした用例調査により潜伏疑問文を抽出し、分析する。
令和1年度	中古中期資料における調査分析	『枕草子』『源氏物語』を資料とした用例調査により潜伏疑問文を抽出し、分析する。
令和2年度	調査データの統合と理論的検討	前年度までの調査データを統合し、理論的検討を行う。
令和3年度	研究成果のまとめ	国語語彙史研究会での研究発表と研究成果報告書の刊行、発送を行う。

毎年度、年4回の文献調査、研究打合せ会を実施し、研究情報の収集、理論的検討を行った。コロナ禍により、研究期間を1年間延長している。

4. 研究成果

本研究の成果は、研究成果報告書として刊行している。以下では、同書の要点をまとめるかたちで研究成果を報告する。

1) 潜伏疑問文の抽出

中古前期、中期の資料より、全88例の潜伏疑問文を抽出した。それらの全用例は、現代語訳を付して報告書に掲載している。

2) 分析

この研究の目標は潜伏疑問文の探索であり、本格的な分析は今後の課題である。以下に挙げるのは、いまの段階で観察される特徴である。

1) 形態的特徴

- ・名詞句：「N」「NノN」「V+N」「A+N」
- ・述語形態：「知らず」「知らで」「知らじ」
- ・テンス・アスペクト形式、モダリティ形式がつく形は、「知らざりけり」「知らざらむ」のみ。いずれも連体用法。

2) 統語的特徴

- ・終止法が少ない(7/88)。文中用法(連用用法、連体用法、準体用法)が多い。
- ・条件節に埋め込まれた例はない。
- ・係り結びになりにくい 例外：「命ぞ知らぬ」
- ・目的語は、「ハ」「モ」「ヲ」で表示される。「モ」が最も多い。

3) 意味的特徴

- ・名詞句の意味は、気持ち 場所・方向 未来 程度 様態 理由 方法 など多岐にわたる。
- ・『源氏物語』では事情が多く見られる。
- ・「心」「行く方」が多用されている。
- ・述語「知らず」は、「わからない」に相当する例が多い。
- ・全体から要素を取り出して除外する用法がある。「～はさておき」「～は別として」

4) 運用論的特徴

- ・文タイプは、どのタイプにも使える。心内文の使用は少ない。

上記の特徴をもとにすれば、おおよそ以下のことが言えるであろう。潜伏疑問文の使用は、作品、文タイプにおいて大きな偏りはなく、目的語名詞句の意味も多岐にわたる。終止法での使用は少なく、連用修飾成分、連体修飾成分となる例が多い。係り結びの例はまれである。これらの特徴より、係り結びによる直接疑問文(「～ヤ、カ……」)の運用の不自由さを埋めるべく、節連鎖においてその利便性を発揮したと考えられる。係り結び疑問文や引用句に埋め込む疑問文に比して、音数が少なくて済むことから、和歌で使用するのにも便利である。目的語の特別な標識も必要としない。

その一方で、疑問の明示性に欠け、対他性は強くない。文脈に依存して質問文になる。汎用性において優れるが、不確定事態を明示的に提示するには適していないのである。宮中のサロンのように、狭い言語共同体のなかで用いる場合には問題が生じにくい。不確定事態の明示性が求められるようになると、別の表現が必要とされる。そうした動機付けによって、間接疑問文が発達してきたと考えられる。

以上は、現時点での見通しに過ぎず、今後の検討が必要である。潜伏疑問文は時代を通して使用される表現であり、係り結びによる直接疑問文や間接疑問文よりも時間的に長く用いられ続けてきている。疑問文の体系においては周辺的に位置づけられるかもしれないが、基幹をなすものとして捉え直すことが可能ではないだろうか。

なお、古典語で潜伏疑問文を扱う際には、適用範囲に注意する必要がある。現状では、疑問文との置き換え可能なものはすべて潜伏疑問文と認める立場と西山氏の定義に基づき限定的に認める立場とがある。本研究は、名詞句の記述分析を重視し後者の立場をとるが、適用範囲については今後さらに検討すべき課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高山善行	4. 巻 71
2. 論文標題 対照文法の方法 現代語と古典語の違いをどう捉えるか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛国文研究	6. 最初と最後の頁 129-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高山善行
2. 発表標題 文法の史的対照は何をもたらすか 「連体ナリ」と「ノダ」の比較
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高山善行
2. 発表標題 文法史研究の最前線
3. 学会等名 愛媛国語国文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高山善行
2. 発表標題 中古語の潜伏疑問文をどう捉えるか
3. 学会等名 国語語彙史研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高山善行	4. 発行年 2021年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 294
3. 書名 日本語の歴史的対照文法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	西 耕生 (NISHI KOUSEI) (30259452)	愛媛大学・法文学部・教授 (16301)	文学研究の立場から、文献情報の教示、調査データの分析に関する助言を行う

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------